

これからの科学研究と論文捏造

村松秀著「論文捏造」(中公新書ラクレ)を読んだ。この本は最近出版されたものではなく、2006年9月に出版されたものである。しかし、私はこういう本があることを最近まで知らなかった。読んでみて、必ずしも著者が意図したことではなかったかもしれないが、結果として、これからの科学研究の問題点を抉り出したことになっていると思うので、ここで取り上げることにした。

本書の内容は、ベル研究所で起きた大規模な論文捏造に関するもので、この事件そのものは、科学研究に携わる人たち、とくに超伝導体や機能性物質の研究者にはよく知られていると言ってよいだろう。

著者の村松氏は1968年生まれで東大工学部出身、2006年の時点で、NHKの科学・環境番組部専任ディレクターとして、人気番組「ためしてガッテン」やNHKスペシャルなどを担当していた人である。

本書は、NHKの番組[2004年10月9日放送のBSドキュメンタリー「史上空前の論文捏造」及び2005年3月9日初回放送のハイビジョン特集「史上空前の論文捏造」]で取り上げられた、ベル研究所での論文捏造事件に関して、村松氏らが行った調査・取材をもとにして書かれたものである。NHKという巨大組織の力があってこそ、これだけ徹底的な調査・取材ができたものと思われ、このような調査・取材が行われなければ、関係分野の研究者ですら知り得なかったの

ではないかと思われる事実が明らかにされている。その点で、本書は貴重な文献であると言える。

今回の「ひとこと」の目的は、この事件を紹介することではない。しかし、事件の概略を述べると次のようであった。ベル研究所は、物理学や情報科学分野など広い分野で世界的な名声を持つアメリカ有数の民間研究機関で、ノーベル賞受賞者を多数出した実績を持っている。この研究所の契約研究員(おそらく大学のポスドク相当の職)であった若いドイツ人研究者ヤン・ヘンドリック・シェーン(Jan Hendrik Schön)は、1998年から2002年にかけて一流雑誌に多数の論文を発表したが、そのうちの相当数は捏造されたものであったことが発覚して、シェーンは2002年に解雇された。この事件には、①シェーンの論文の内容が極めて斬新に見え、世界中の研究者に衝撃を与えたこと、②共同研究者であり研究リーダーでもあったバートラム・バトログ(Bertram Batlogg)が高い研究業績をもつ有力研究者であったこと、③シェーンが発表した論文の数が異常に多かったこと(63報)、④多くの研究者が追試を試みたが、シェーンが報告した結果を再現できなかったこと、などさまざまな事情が絡んでいる。

村松氏らの調査で明らかになったことには、信じがたいことも含まれている。そのひとつに、有機化合物の超伝導が実現する温度を驚異的に上昇させたとするシェーンの実験に、バトログが一度も立ち会ってい

なかったことがある。バトログは、捏造されたものであることが確認された論文のほとんど全ての共著者であったが、事件の調査委員会は、バトログに捏造についての責任はなかったとした。しかし、彼には道義的責任があると私は思う。現在、バトログはスイス連邦工科大学(ETH)の教授を勤めているが、今後も道義的責任を問われ続けることになるだろう。

何故このような事件が起きたのだろうか。論文作成において、いろいろな形の不正行為が絡んだケースは昔からあった。しかし、シェーンの場合のように、多数の衝撃的な内容の論文を完全に自分の想像力だけで書いてしまったのは初めてのことだった。しかも、有力研究者である共同研究者がそれをチェックできなかった。また、最も権威ある雑誌とされているNature, Science, Physical Reviewなどの論文審査システムも捏造を見抜くことができなかった。これは真に情けないことであったが、科学の研究から結果の発表に到る過程における重大な問題を抉り出したものだと思う。

先端的な科学研究は熾烈な競争の世界である。これは実は昔からそうなのだが、現代の科学研究において重要な成果を挙げることは、研究者の名誉(受賞など)と実利(良いポジションに就くことができること、特許を得て、それによって収益をあげることに直結している場合がある。このような場合、重要な成果を得ようという功名心が異常に高まることになる。逆に成果が出ないと研究者としての道を断たれかねないので、それを恐れる強迫観念もある。要するに、功名心と恐怖心とが背中合わせになっているのだが、まだ安定した職に就いていない若い研究者は、まさにこういう状況で研究をしなければならない。これは心理的に非常に大きな負担を強いる状況である。

若い研究者がこのような厳しい環境におかれると、実験結果の代わりに、想像力の産物や何らかの計算結果などを使って、論文をきれいな形にまとめようという誘惑に

かられるとしても不思議ではないかもしれない。学生・院生時代のシェーンを知る人たちやベル研究所で近くに居た研究者仲間、口を揃えて、シェーンは親切な付き合いやすい人で、決して異常な性格の持主ではなかったと証言している。

シェーンは、自分は捏造をしたわけではないと主張していたが、ベル研究所から解雇されて以来、関係者と会わない状態になっている。村松氏もシェーンの自宅を探し出して、インタビューを申し込んだが、断られている。したがって、シェーンがどういう心境で論文捏造に手を染めたかを知ることにはできないのだが、私は、シェーンは上記の誘惑に負けて、捏造に手を染めてしまい、その論文への反響が余りに大きかったので、後に引けなくなったものと見ている。そういう状態になると、後に引けないというよりも、もっと積極的に捏造を続けようという特殊な心理状態に陥ってしまうものらしい。名声を手に入れると、この状態は更に高揚して、現実と想像の間の区別が付かない一種の恍惚状態になってしまうのだろう。そういう、普通の人間には想像もつかないような心理状態になっていたのであれば、1週間に1論文という、信じられないぐらい早いペース(2001年にはそういう時期があった)で捏造を続けたことを説明することはできないと思う。

このようなことは、今後起こらないと言えるだろうか。シェーンの場合ほど大規模な事件は繰り返されないだろうが、論文捏造自体は今後増え続けるのではないかと思う。それは、上記のような研究者間の競争は益々激しさを増していくと思うからである。それでは、日本ではどうか。私は、日本でも論文捏造は増えるだろうと予想している。アメリカなどよりも、日本の方がむしろ心配な状況にある。アメリカは、元来開けっぴろげの競争社会であり、若い研究者も誘惑に対する「免疫力」を持っていることが多いのではないか。それに対して、日本は、未だ本当の意味の競争社会にはなっていないのに、大学院生やポスドク、任期

付きの若手教員などは強烈な国際的競争を強いられるのだ。

わが国では、ポスドクや助教（助教は昔の助手相当の職だが、任期付きであることが多い）など任期制の職に就いている人たちをどう処遇するかが、既に大きな問題になっている。これら若い研究者の処遇を、国の研究政策の一環として、真剣に検討すべき時期に来ていると思う。これを避けては、日本の研究に本当の意味での進歩はないのではなかろうか。（おわり）